

自閉症のある人たちの社会生活能力の加齢変化（5）

○近藤裕彦

（社会福祉法人檜の里 あさけ学園）

KEY WORDS: 自閉症、社会生活能力、加齢変化

（目的）

近年、自閉症のある人の生涯発達に関する研究は、成人期から 50 歳以上のその後の人生へと進んできた（Edelson ら, 2021）。関連して、A 園利用者における社会生活能力の追跡調査も 30 数年に及んでいる。今回の報告は 15～59 歳までの加齢変化の検討を目的とした。

（方法）

a. 対象者

A 園の入所及び通所、グループホームを利用する知的障害を伴う自閉症のある人 76 名。知的障害水準は、重度（IQ 35 以下）群 34 名、中度（IQ 36～50）群 28 名、軽度（IQ 51 以上）群 14 名となっている。

b. 新版 S-M 社会生活能力検査（1980）の実施

本検査を 5 年間隔で 6 回実施し、対象者は A 園利用開始時から継続的に参加している。評定結果は、担当支援員とサービス管理責任者、複数の職員でチェックされた。

c. 結果の整理

(1) 系列法によって、15～59 歳まで 5 歳間隔の 9 つの年齢段階ごとに全体 SQ（社会生活指数）、全体 SA（社会生活年齢）、すべての下位領域（SH：身辺自立、L：移動、O：作業、C：意志交換、S：集団参加、SD：自己統制）SA について、上記の各 IQ 群に分けて平均値を算出する。

(2) 各 IQ 群について、全体 SA 及び下位領域 SA がピークを迎えた 25～29 歳（近藤, 2016）の平均 SA と、Edelson ら（2021）が高齢と定義した 50～54 歳の平均 SA（月齢）との差を比較する（図 1）。

d. 倫理的配慮

個人が特定できないようデータを統計的に処理する等を所属機関及び保護者に説明し、発表の許可を得ている。

（結果）

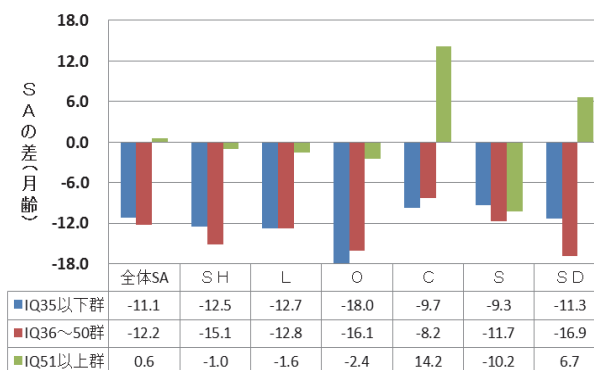
① 社会生活能力の全般的な加齢変化

各 IQ 群の 10 歳代後半から 50 歳代後半までの加齢曲線は、これまでの近藤（2016）とほぼ類似する結果が得られた。具体的には、サンプル数の少ない軽度群の 15～19 歳のデータを除き、重度群と中度群の全般的な社会生活能力は 25～29 歳でピークに達した後、30 歳代以降は徐々に低下してきた。けれども、軽度群のピークはやや遅れて 25～29 歳から 30～34 歳で現れるが、その後も横ばいか、再びわずかに上昇しつつある。

② 各下位領域スキルのピーク時と高齢初期の差異

図 1 のとおり、全体 SA は全体 SQ の加齢変化と同調して、重度群と中度群はともに 50～54 歳データの方がピーク時より約 1 歳分低くなっているが、軽度群ではほとんど差が見られなかった。各下位領域のうち、全体 SA と同じ傾向を示したのが[身辺自立][移動][作業]の 3 領域であり、特に[作業]は軽度群が若干の低下に比して、重度群と中度群では 50～54 歳データの方が約 1.5 歳分低くなり、全下位領域の中で最も低下の幅が大きい。また、[意志交換][自己統制]の 2 領域は、重度群と中度群が[身辺自立][移動][作業]と同じく、50～54 歳データの方が 1 歳分前後低くなったの

図 1. 20 歳代後半と 50 歳代前半との各領域 SA の差



と対照的に、軽度群では 0.5～1 歳分以上高くなってきた。さらに[集団参加]のみ、全 IQ 群において 50～54 歳データの方がピーク時よりほぼ 1 歳分低くなっている。

（考察）

30 数年間にわたる追跡調査を通じて、50 歳代までの全般的な社会生活能力の加齢曲線は、重度及び中度の知的障害を伴う自閉症のある人でほぼ安定し、前述したとおり、20 歳代後半にピークを迎えた後は漸減していく曲線が見出された。また、軽度の知的障害を伴う群では、ピークが 30 歳代後半とやや遅れ、その後も横ばいか、あるいは微増の曲線を示している。今後も、フォローアップを続けていく必要があると考えられる。

ピーク時と 50～54 歳時の各下位領域 SA の差異を検討すると（図 1）、知的障害の重度群と中度群はほぼ同様の低下を示しており、特に[作業]と関係する手指の微細運動の衰えが示唆される。一方の軽度群では、[身辺自立][移動][作業]がほぼ横ばいの反面、[意志交換][自己統制]に有効な地域支援の成果とみられるような伸びが出現した。しかしながら、[集団参加]は自閉症全体に共通する障害領域のためか、他の IQ 群と同じくらい低下したと推測される。

最後に、A 園利用者のうち暦年齢の高い者は 50 歳代 28 名（36.8%）、60 歳代の 2 名、70 歳以上が 1 名を数えた。このうち病的老化の段階にある者は皆無だったが、今後の課題のひとつとして、数量的研究では困難な個人差に関する検討・配慮を深めていく取り組みが重要と考えられる。

（文献）

Edelson, S.M. ら(2021). Strategies for research, and policy for autism in later life : A report from a think tank on aging and autism. Journal of Autism and Developmental Disorders. 51, 382-390.

近藤裕彦(2016). 自閉症のある人たちの社会生活能力の加齢変化(4). 第 54 回日本特殊教育学会大会論文集.

三木安正(1980). 新版 S-M 社会生活能力検査手引. 日本文化科学社.

(KONDO Yasuhiko)